

大坂新聞 548/11/24

中国情報

中 嶋 嶺 雄

米中関係の新展開と台湾

当面、急激な変化ない

揺れ動くニクソン政権のなかで、ひとりをはいっている感のあるキッシンジャー氏は、さる十一月十日から四日間の、國務長官としては最初の視察六度目の中国訪問を終了し、モ・周両首脳と会談して共同コミュニケを発表した。

二年来の國際情勢の大きな変化や中東戦争の問題、アジアに及び得るソ連の影響などにこの米中首脳会談では、(一)二、二年米の國際情勢の大きな変化や中東戦争の問題、アジアに及び得るソ連の影響などにこの米中首脳会談では、(一)二、

されたいこととが共同コミュニケからうかがえる。しかし、米中国際関係の進展はなかった。

もともと、キッシンジャー長官の訪中による、コミュニケにあつたわけではない重大な合意が今回もあつたとされているが、それは台湾問題を省略したまま米中国交樹立へ向けて歩を進めるための措置ではあつても、台湾の地位にドラスチック

クな変更をもたらすものではないとほば斷言できる。

米中接近をはかつて以来、アメリカ側はこの点では「一つの中国、だがすぐにではなONE CHINA BUT NOT NOW」という基本政策を一貫して堅持している。さきのニクソン訪中による上海コミュニケも、そしてこのキッシンジャー訪中と前後して発表された在台北米軍の漸次撤退の方針もすべてこの基本的枠組のなかに組みこまれ得るのである。

アメリカのすぐれた中国研究の中堅で、米中接近以来、キッシンジャー氏の中国問題のブレーンになっているリチャード・ソロモン前シシガン大学助教が今回も同行していることからしても、この点は明らかだとみていい。

一方、中国側としても、このようなアメリカの出力に興奮を賜えてはいないようであり、台湾問題の現実的で長期的な解決をむしろ望んでいるとさえ思われる。この二つのコミュニケでは、「米中両国関係の正常化は一つの中国の原則を確

認する義務のうえに立って」というかたちでそれが表明されており、原則を、確認する、という含意の多い表現がとられたのであつた。

中国としても、ソ連による対中予防戦争という情報や、台湾政権へのソ連の接近という情報がこのところ相次いでいる現状で、台湾をこれ以上出口のない状態に追いやることはできないだろう。また国内的にも、全国人民代表大会が依然として閉けず、人民解放軍の首脳人事も林彪異変以来空白のままであるうちに、最近の「孔子批判・始昌評価」に暗示されるように、周恩來批判、とも思われる政治潮流を内にかかえていて、台湾の現状維持が精一杯なのであつた。

この風で、キッシンジャー長官が「たとえなにが起つても、どんな政権が登場しようとも米中友好は不変である」旨を述べた言葉から「どんな政権が登場しようとも」という一句を新華社通信が添えて削除して伝えたのは、ニクソン政権の将来の不安定性にかかわる問題からだけではないとも思われる。

いずれにせよ、台湾の将来の地位に重大な変更が及ぶことは、当面ありそうにない、といわれねばならない。

(東京外大助教)